初級日本語授業における反転授業の試み

永　井　涼　子
中　野　祥　子
上　野　まり子

要旨

本研究は，初級後半レベルである日本語Ⅱ（総合）のクラスにおいて反転授業を導入した試みについて紹介し，そのメリット・デメリットについて分析および考察を行うものである。文法説明，基本練習を文法ビデオに収め，留学生はそれを視聴した上で対面授業に参加するという方法を実施した。その結果，留学生からの満足度が高く，学習効果も見込まれたが，一方でビデオを見ない留学生に対する働きかけにおいて課題が残った。

キーワード

初級日本語，反転授業，総合クラス，アクティブラーニング

1 はじめに

近年，「学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称」であるアクティブラーニング（文部科学省， 2012:37 ）の重要性がさまざまな教育分野で指摘され，多様な授業改善が試みられている。この傾向は日本語教育においても同様で，ペアワークだけでなくグループワーク，ディスカッション等が積極的に用いられている。

本研究ではアクティブラーニングの一つである反転授業という教育方法に着目した。反転授業とは，「説明型の講義など基本的な学習を宿題として授業前に行い，個別指導やプロジェクト学習など知識の定着や応用力の育成に必要な学習を授業中に行う教育方法」（山内・大浦，2014:3）とされる。本研究では，この反転授業を初級日本語授業に取り入れた試みを紹介するとともに，留学生の取組状況や担当教員の所感等から初級日本語における反転授業の可能性について考察することを目的とする。なお，本研究は山口大学人一般研究審査委員会での承認を得ている。

2 従来型授業の抱える問題

今回，反転授業を取り入れた日本語授業は，山口大学留学生センターが実施している，共通教育科目「日本語Ⅱ（総合）」である。本章では日本語Ⅱ（総合）に反転授業を導入する経緯について，従来型授業の抱える問題点を当該レベルの抱える問題，上のレベルとの接続の問題，履修者の特徴の持つ問題の 3 つの観点から指摘しつつ，述べる。

2.1 日本語Ⅱレベルとは

山口大学における日本語Ⅱレベルとは，日本語能力試験（以下，JLPT）のN5合格レベルに相当する。山口大学日本語分科会がまとめた「2023年後期　日本語科目履修案内」（ p.5 ）によると，具体的には以下のような日本語力を持った学生が対象である。

- ひらがな・カタカナをすべて読み書きできる。
- 毎日の習慣や，週末にしたことなどについて，話すことができるが，長い会話を続けることは難しい。

・授業中に，クラスメートが話した身近な話題について，大体の内容が理解できる。
・日本語のクラスで，教師が話す短い指示が理解できる。

つまり，山口大学における日本語Ⅱレベルとは初級後半レベルの日本語を学ぶレベルである。本学では，日本語Ⅱレベルにおいて，日本語Ⅱ（総合）と日本語Ⅱ（読む・書く）という２種類の授業を実施している。

本研究の対象である日本語Ⅱ（総合）のクラスは週に３コマ（１コマ90分）実施されている。従来の授業では，１コマで２つの文法項目を扱い，授業中に教員が説明し，その後，教科書の練習問題を解く。そして宿題としてワークブック（復習）を課すという授業方法であった。しかし，教えるべき項目に対して授業時間数が少なく，文法の導入および基本練習に授業時間を大幅に取られ，会話練習等の応用練習がほとんどできないという状態が続いていた。

2.2 初級後半のレベルが抱える問題

ここでは日本語Ⅱレベルが初級後半レベルに相当するというところから，初級後半レベルの日本語教育の抱える一般的な問題について述べる。

初級後半レベルとは，日本語の文型や活用の基礎的な部分を習得し，中級レベルに向けてより難易度の高い文型（例えば連体修飾節や受け身文等）や抽象度の高い語彙（例えば理想や社会等）を学んでいくレベルである。そのため，初級前半レベルで培った日本語学習方法が通用しなくなることも多い。例えば，初級前半レベルでは，過去形や普通形等，活用を覚えることが多いが，そのような暗記だけでは習得できない文法項目も多々ある。授受動詞や受け身文，使役文などがそれにあたる。また，初級の前半と異なり，習った文法項目を使った文型練習を積み重ねることも少ない。例えば，初級前半でテ形を学んだ場合，その後，「～てください」「～てもいいです」「～てはいけません」「～ています」とテ形を使った練習を重ねていくが，初級後半の文法項目ではそのような項目はほとんどない。つまり，１つの文法項目が理解できていなかったとしても，復習の機会は少なく，それが理解されていることが前提にどんどん授業が進んでいくのである。さらに，語彙も「本」や「傘」等，絵で示せるような具体物以外の語彙が増えてくる。

このような状況下で，学習者は学習方法を柔軟に調整しながら学習を進める必要がある。しかし，複雑化する文型や増えていく語彙量が負担となり，学習につまずく留学生が多いレベルである。これは本学の日本語Ⅱでも言えることである。

日本語Ⅱ（総合）の授業では授業時間数に余裕がないため，復習や応用練習がほとんどできていなかった。そのため，理解できていない項目があったとしてもそれをキャッチアップすることはかなり難しかった。また既習項目の理解が前提となり，教科書の練習問題が作成されているため，当該の文法項目ではない既習（のはずの）項目において理解ができていない留学生が続出し，その対応に追われてさらに時間がなくなるという悪循環に陥っていた。

2.3 日本語Ⅲレベルとの接続の問題

上述のような特徴と問題を持つ，日本語Ⅱレベルを終えた留学生が次に進むのが，日本語Ⅲレベルである。日本語Ⅲレベルは「2023年後期　日本語科目履修案内」（p.5）によると，JLPTのN4合格相当であり，以下のような日本語力を持った学生が対象である。

・ゆっくりわかりやすく話してもらうと聞き取れるが，普通の速さの話を聞くのは難しい。
・授業の内容や，日程・手続きについての説明の要点を聞き取れる。
・200～300字程度の漢字を読むことができる。

・自分の趣味や，家族のことなど，身近な話題についての短い文章の読み書きができる。

日本語Ⅱレベルを終えた留学生が日本語Ⅲレベルに進んだ際，授業の難しさを訴えることが多い。それは，初級レベルと中級レベルの差によるものである。

元来，初級レベルと中級レベルの接続の難しさは指摘されており，「初中級」レベルの橋渡し的な教科書がいくつも刊行されている。例えば，『中級へ行こう』[1)]，『できる日本語　初中級』[2)]，『まるごと　日本のことばと文化　初中級』[3)]などがある。日本語の授業科目数に余裕があれば橋渡し的なレベルを設けることも可能であるが，山口大学の現在の日本語レベルでは橋渡し的役割を果たす初中級レベルの授業は存在しない。また，日本語Ⅱおよび日本語Ⅲレベルの授業において授業時間数の余裕もなく，初中級レベルの内容を扱うこともできない。

このような状況下で日本語Ⅲレベルに上がった留学生が授業の難しさに悩んだり，中には日本語Ⅱレベルに戻ってきたりする。日本語Ⅲレベルに上がった留学生が感じる難しさとしては，教科書における漢字の多さ，教科書および教員の媒介語（本学の場合は英語）の使用頻度が少なくなること，総合の授業では初級日本語と異なり文章読解が増えること（慣れていないこと）などが挙げられる。

2.4 履修者の特徴とその問題

次に本学における日本語Ⅱレベルの履修者の特徴とその問題点について述べる。日本語Ⅱレベルを履修する留学生の出身は漢字圏・非漢字圏を含み，多国籍である。また身分も，本学の日本語学習者に多い交換留学生だけでなく，大学院生等も含まれる。本学では，正規生および交換留学生は日本語授業を履修し単位を取得できるが，大学院生等は単位を取得することができない。そのため，大学院生は自分の生活や研究のために受講しており，出席率や課題への取り組み状況にバラつきがある。また，日本語Ⅱレベルは履修者の数があまり多くない学期が多いという特徴もある。

つまり，多様な留学生が参加するレベルであると言える。単位が取れない大学院生は課題やクイズの取り組みや出席率において，単位が必要な交換留学生と温度差があることもあり，また漢字圏かどうかも読解スピード等に影響を及ぼす。そのため，クラス運営が難しいレベルと言える。

以上のように，日本語Ⅱレベルには，初級後半というレベルが持つ問題，上のレベルとの接続の問題，履修者が多様であるという問題を有しており，効果的な授業実施を行う上で初級後半コースの設計を再考する必要があると言える。

3 反転授業

２のような問題を解決する方法として，本研究では反転授業に注目した。以下で詳述する。

3.1 反転授業とは

反転授業とは，「説明型の講義など基本的な学習を宿題として授業前に行い，個別指導やプロジェクト学習など知識の定着や応用力の育成に必要な学習を授業中に行う教育方法」（山内・大浦，2014:3再掲）である。具体的な手順としては，「従来講義として説明していたものはビデオに収めて事前学習にするのが一般的である」（手塚，2020：19）。つまり，反転授業は事前学習を学習者に求め，それをもとに授業ではより応用的な内容を行うものである。事前学習は授業の一部を授業前に自宅で実施するため，単なる予習ではなく，何らかのフィードバックを要求するものであると言える。

反転授業の特徴を従来型の対面授業と対比させながらまとめた原（2022:24）によると，以下のような違いがある。

まず従来型対面授業では，授業で知識を得てから自宅での宿題や復習を通して知識の定着を図ることが多い。一方，反転授業ではあらかじめ自宅で知識を得たのち，教室でその知識を活用しながら知識を定着させる。つまり，前者では教室で知識を得るところから学習が始まるのに対し，後者では自宅の予習で知識を得るところから学習が始まるというところにその違いがある。

このような反転授業はアクティブラーニング型授業の質を高める方途として，近年急速に注目されている（原， 2022:24 ）。山内・大浦（2014）は反転授業の類型として「完全習得学習型」と「高次能力学習型」を示している。「完全習得学習型」とは，全員が一定基準以上理解することを目指すものであり，「高次能力学習型」とは高次能力の育成を目指すものである。

3.2 日本語授業における反転授業

日本語授業における反転授業の実践については，さまざまな先行研究が挙げられる。基本的には山内・大浦（2014）の言う「完全習得学習型」の反転授業がほとんどである。授業科目としては，文法（手塚， 2020; 中溝，2016）や日本事情（原，2022）などが挙げられる。事前に座学で説明を聞く必要のある科目が反転授業に向いていることが伺える。対象レベルとしては，自分なりの学習ストラテジーを有していると考えられる中級～上級レベルにおける実践が多いが，初級レベルの学習者に関する実践についても町田（2019）等いくつか見られる。

また経緯としては，大田他（2022）のように，コロナ禍により授業がオンライン化される中で，反転授業に取り組んだ事例も見られる。

3.3 反転授業のメリット・デメリット

反転授業のメリットとしては，中溝（2016）では，グループ活動，質問時間の確保が好評であったと述べられている。手塚（2020）の実践では，講義動画については，毎学期65～85％の学習者が「役に立った」と答えており，その理由としては，「ビデオは印象に残る」「もう一度見られる」「授業の緊張感が和らぐ」「よく覚えられる」などが挙げられている。

一方，デメリットとしては，ビデオを見てこない学生がいることが挙げられる。クラスの雰囲気をはじめ，対面授業時の教員のクラス運営の手腕が問われると考えられる。

4 日本語Ⅱ（総合）における反転授業

本研究では，日本語Ⅱ（総合）科目の抱えている諸問題を解決するため，反転授業を実施した。

4.1 授業概要

筆者らは2022年後期～2023年後期の 3 学期にわたり，日本語Ⅱ（総合）において，文法ビデオを用いた反転授業を実施した。本研究も山内・大浦（2014）の言う「完全習得学習型」の反転授業である。

反転授業を実施することにより， 2 で指摘した「初級後半というレベルとしての学習上の困難さ」「レベル接続の難しさ」「クラス内の参加度の違い（宿題提出率・出席率等）」といった問題に対応することを目指した。具体的には，難易度が上がった文法項目は必要に応じてビデオを何度も見ることによりじっくり学習することができる。また，ビデオで基礎的な部分を学ぶことにより授業内でより応用的な内容に取り組めるため，上のレベルへの接続もよりしやすくなる。さらには，出席できない日があったとしてもビデオの視聴により授業に追いつくことができるということを狙いとした。

教科書は基本的に『げんきⅡ』[4] を用いた。これは従来の授業と同じである。2022年度後期は12～22課を，2023年度前期は13～23課を扱った。2023年度後期については学期途中で

あるが13～23課の予定である。反転授業はこの全ての学習項目において実施した。また副教材として『げんき』のワークブックも使用した。ワークブックは復習のクラスや宿題として利用することが多かった。

反転授業の具体的な取り組みとしては，週３コマ（１コマ90分）ある授業を，文法学習の時間（１コマ）と応用学習の時間（２コマ）に分けた。

文法学習の時間は反転授業の「事前学習」に相当する。具体的には，応用学習の時間に扱う文法項目（１週間で約 5-6 つ）の全てに関するビデオをMoodle上に用意し，留学生はそれを視聴する。このビデオは１つの文法項目に対し１つ作成し，モジュール形式で学べるようにした。ビデオの内容は，当該文法項目の説明および練習 A である。説明を聞き，理解した上で一旦ビデオを止め，練習 A に取り組む。その後，ビデオを再生し，練習 A の答え合わせと解説を見る。その週の全てのビデオを視聴した後，Moodle上にある文法クイズに挑戦し，理解を確認する。これらのビデオ視聴およびクイズは，前の週の応用学習の時間が終わってから次の応用学習の時間が始まるまでの約５日間利用可能とし，留学生が都合のいい時間に何度でも取り組めるようにした。全てのビデオの視聴ログ（アクセスログの再生ログ）をもって出席とみなした。文法クイズは成績評価の項目として利用した。応用学習の時間の事前学習としての役割が大きいが，基本的な練習問題を実施したり，文法クイズを実施して理解度を確認したりするなど，授業として双方向になるように努めた。

応用学習の時間は対面授業である。文法学習に関する質疑応答を行った後，教科書の練習問題（B 以降）に取り組む。練習 A は基本的に１人でする理解確認の問題であるのに対し，B 以降はペアワーク等を含む，活動的な内容が多いため，このような分担とした。ワークブックは応用学習の日の宿題として課した。また応用学習の日は，語彙クイズや活用クイズも実施した。

4.2 授業準備

ここでは主に文法学習の時間に関する授業準備について具体的に述べる。学生に提示するのは，文法ビデオで共有するスライド（PDF ファイル）および文法ビデオである。これらは全てMoodleにて共有を行った。

スライドは，１つの文法項目につき１つ作成した。まず，図１のようにイラストを使った文型導入を行い，文型の基本的な概念を理解することを目指した。イラストについては主に「いらすとや」のイラストを使用した。またフォントはUD教科書体を使用した。漢字は日本語Ⅱ（読む・書く）の進度を参考にしながら，フリガナを振った。

図1 導入部分のスライド例

その後，図２のように文型の詳しい説明を，やさしい日本語と英語を使いながら示した。この文法説明については，日本語Ⅲレベルへの接続をよりスムーズに行うため，課を追うごとに少しずつ日本語の基本的な文法用語を増やしながら説明を行った。例えば，「動詞」「名詞」「て形」「過去形」などである。

図2 文法説明部分のスライド例

その後，図３のような練習Ａの解き方に関するスライドを作成した。

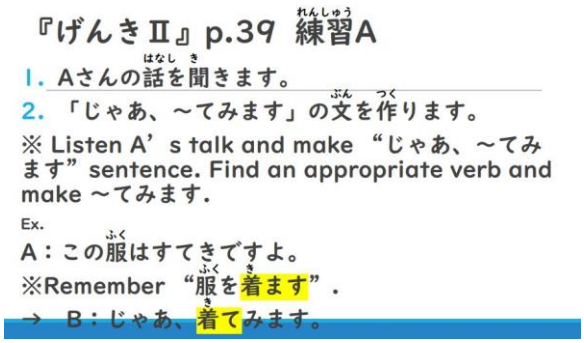

図3 練習Ａ導入部分のスライド例

この際，ビデオの音声が聞き取れない留学生もついてこられるよう，教科書のページ番号を記載し，取り組み方についても具体的な説明をするように心がけた。

また，その後，初級日本語げんき第３版公式サイトにて無料でダウンロードできる，音声付き「練習」スライドを使いながら，練習Ａの答え合わせと解説を行った。この際，音声付き「練習」スライドの後に，練習Ａの答えを文字でも示したが，きちんと文法ビデオを見るようにするため，練習Ａの答えはビデオの中でのみ公開することとし，Moodleに挙げたスライド資料の中には含めないこととした。

ビデオは，筆者らが作成したスライドおよび音声付き「練習」スライド等，複数の授業用資料を提示しながら行うため，zoomを使って作成した。教員の顔を映し，口の動きなどが読めるようにした。またゆっくり，はっきりと発音し，できるだけスライドにない言葉は話さないように努めた。それにより，一方的なビデオであっても留学生がきちんと話についていけることを目指した。ビデオの時間は１つにつき，10分～20分である。できるだけ15分以内にしたかったが，丁寧な説明が必要な項目は留学生の理解を優先して長くした。作成したビデオは，Kaltura メディアリソースを使用して共有し，学生もアクセスログが見られるようにした。スライドおよび文法ビデオは2022年後期は60件，2023年前期は52件作成・利用した。

文法クイズは，Moodle上にオンラインクイズを作成した。各文法項目につき５問クイズを作成した。基本的には多肢選択問題を４問，自由記述問題を１問作成した。文法クイズは理解を確認するために行うもので，何度でも受験可能とした。またこの文法クイズの点数は成績にも反映させることとし，高得点を狙う学生が何度も挑戦して理解を確実なものにすることを目指した。

文法ビデオやクイズについては練習用のビデオ，クイズを作成し，オリエンテーション時に学生とともに取り組み，使い方がわかる状態にしてスタートした。またスケジュールをMoodleにて共有し，学生自身が学習管理をできるようにした。

5 考察

本章では，４の実践の結果について，動画の平均視聴率，授業アンケート，授業担当者の所感や留学生からの意見をもとに考察する。

5.1 動画の平均視聴率

Moodleにアップした動画の平均視聴率について，既に学期が終了している2022年度後期および2023年度前期に関して分析を行った。その結果，2022年度後期は93％，2023年度前期は80％であった。つまりほとんどの動画が見られていたと言える。

平均視聴率についてさらに詳しく分析する

と，全体を通して視聴率が半分以下の学生が数名おり，それによって視聴率が下がっているものの，見ている学生は基本的に9割以上の視聴率だった。つまり，ビデオを見る学生と見ない学生と大きく分かれていた。

文法項目の難易度と視聴率の関係を分析すると，中間試験前後で，2022年度後期は92％→94%，2023年前期は87％→68％であり，文法項目が難しくなったから視聴しなくなったとは言い切れない。

以上より，平均視聴率は8割以上と高く，多くの学生がほとんどの動画を視聴していたことがわかる。学生が視聴するかどうかは文法の難易度ではなく，個人によるものであることが伺える。

5.2 授業アンケート結果

ここでは2023年度前期に山口大学が共通教育科目において行った授業アンケートの結果から，本研究の試みについて考察する。

「あなたは，この授業の内容を理解できましたか？」という質問に対し，「そう思う」67%，「ややそう思う」33％と全員が理解できたと回答した。また，「あなたは，この授業について満足しましたか？」という質問では全員が「そう思う」と回答した。

以上より，反転授業を取り入れた授業に対して，学生は好意的に受け止め，反転授業による理解度の低下を感じた学生はいなかったことが示唆される。

5.3 授業担当者の所感

まず，従来の日本語Ⅱ（総合）における授業時間数が少なく感じられた問題については，本試みによりかなり解消された。これまで実施できなかった応用練習問題も実施でき，復習クラスや日本人学生を呼んだビジターセッションを行う余裕も生まれた。また，祝日や長期休みで授業が実施されない時期にもビデオの視聴を課すことにより，継続的な学習を実施することができた。

次に応用学習の時間を担当した授業担当者の所感から，本試みについて考察を行う。

まずよかった点として，①大人数クラスにおける会話練習時間の確保に有効であること，②説明時にノートを取りたいタイプの学生に有効であること，③遅刻・欠席しがちな院生に有効であること，④ピア・ティーチングが生まれたこと，⑤復習素材としての可能性，が挙げられる。

①大人数クラスにおける会話練習時間の確保に有効であること：大人数クラスでは，文法説明時やペア・グループワークでの質問対応にやや時間がかかるが，文法ビデオの視聴により文型導入と説明の時間が短縮でき，充分な会話練習の時間が確保でき，10名を超えるクラスにもかかわらず，毎回教科書の問題の全てを授業内に扱うことができた。つまり，導入と基本練習に時間を取られることなく，応用練習に時間を割くことができ，より活動的な内容に取り組めたと言える。

②説明時にノートを取りたいタイプの学生に有効であること：ノートを取りながら学習したい学生にとっては，ビデオを止めながら自分のペースで進められるところがよかった。複数の学生がビデオによる事前学習時に要点をノートにまとめ，授業に備えていた。ビデオによる事前学習時に抱いた疑問を授業中に質問するため，それをクラス全体で共有し，理解が深められたこともよかった。学習者の中にはビデオを見たうえで，その文型を使って毎回作文を書いてくる者もおり，授業後や授業中に添削し，コメントをする余裕もあった。ビデオによる事前学習では，理解（母国語によるノートまとめ）と読み書きにフォーカスし，対面授業では，疑問の解消と聞く，話す，運用することに注力できていた。

③遅刻・欠席しがちな院生に有効であること：さまざまな事情から遅刻や欠席が非常に多く，日本語Ⅱについてこられるか心配されていた学生にとって効果的に働いた。具体的にはビデオによる事前学習をしっかりして授

業に臨んでいたため，問題なく授業についてくることができ，前のレベルのときよりも，明らかに上達した。ビデオをしっかり見て確認問題や練習問題Aを自力で解いてから来ていることが授業態度から見てとれた。遅刻してきても，文型の説明をしなくてもよいため，フォローアップも簡単で，残りのクラスメイトへの悪影響も少なかった。動画による事前事後学習のおかげで，多忙な大学院生が脱落せずに最後まで出席することができた。日本語Ⅱは少人数のクラスになることも多いが，少人数のクラスでは能力の差が開くとペア・グループでの会話練習が難しくなる。欠席により未修項目があると，応用問題を解くのが難しくなりペアワークに影響があるが，今回はそのような心配がなかった。

④ピア・ティーチングが生まれたこと：事前に動画を視聴していない，あるいは視聴したがいまいち理解できていない学生がいた場合に，動画で理解を深められた別の学生が教員に代わって説明したり質問に答えたりという場面が何度か見受けられた。自分で動画を見て学習してくることが大前提ではあるが，学生同士のピア・ティーチングが自然に生まれたことも本試みの意義と考えられる。

⑤復習素材としての可能性：既習者やリピーター等，動画視聴してこなくても困ることはない留学生であっても，欠席の場合や，対面授業で理解度に問題があると判断した場合に「動画を見て復習するように」と指示できるのは便利である。

一方，問題点としては，動画の視聴をしてこない学生がいることである。基本的には個別に授業設計について説明し，動画の視聴が出席扱いになることを理解すれば，視聴を促すことができる。しかし，単位が取れない大学院生に対しては強要することも難しく，単位が必要な学生とともに行うクラス運営の難しさが感じられる。

5.4 留学生から寄せられた声

反転授業に参加した留学生からは概ね好意的な意見が寄せられている。日本語Ⅱで扱う文型のうち，半数以上を母国で既に学習してきている留学生にとっても，動画および確認クイズは良い復習の機会となり，対面授業では実際の運用に集中できた。動画を視聴することにより，リラックスして学習に取り組め，じっくり学ぶことができてよい。何度も見られるのがよい等のコメントが複数寄せられた。

5.5 初級レベルにおいて反転授業を取り入れることのメリット・デメリット

本研究では初級後半レベルの授業に反転授業を取り入れる試みを行った。実際に実施して感じるメリットとしては，①大人数クラスにおける会話練習時間の確保に有効であること，②説明時にノートを取りたいタイプの学生に有効であること，③遅刻・欠席しがちな院生に有効であること，④ピア・ティーチングが生まれたこと，⑤復習素材としての可能性，⑥留学生の満足度が高い，⑦じっくりと文法を理解する時間が設けられる，⑧欠席者や遅刻者への対応にかかる担当者の負担が軽減できること，⑨授業における時間的ゆとりが生まれ，応用練習にも時間が割けること等が挙げられる。

一方で，ビデオを作成する手間がかなりかかること，少数ではあるがビデオを視聴しない留学生がいることがデメリットとして挙げられる。

6 おわりに

本研究では初級後半レベルの総合クラスにおいて実施した反転授業について紹介し，その在り方について分析および考察を行った。本研究では，反転授業のうち，事前学習に相当する内容は，文法ビデオおよび文法クイズを用いたオンデマンド授業として1コマ分使用して実施するという方法を用いた。反転授業で使用した動画の視聴率は概ねよく，授業アンケートからも満足していることが伺えた

ため，実施は概ねうまくいっていると考えられる。ピア・ティーチングが生まれたり，ノートをとってじっくり学習する留学生が出てきたりする等，当初想定していなかったメリットも多く観察された。しかし一方で，動画を見ない学生への視聴の促しが難しいことがわかり，今後の授業運営に工夫が必要なことも明らかになった。

また，手塚（2020）でも指摘されているように，反転授業を実践するにあたって最もよく考えるべきことは，対面授業における教室活動をどうすべきかであるため，今後は応用学習の時間の進め方についても工夫を重ねていきたい。

（国際総合科学部　准教授）
（留学生センター　講師）
（留学生センター　非常勤講師）

【参考文献】

大田美紀・早川直子・小川靖子・江森悦子・牟田綾・平田佑和・竹本恭子・竹田恒太，2022，「インドネシア人・フィリピン人看護師・介護福祉士候補者を対象とする反転授業によるオンライン日本語研修の実践： EPA に基づく訪日前研修の新たな取り組み」『国際交流基金日本語教育紀要』第 18 号71-82.

手塚まゆ子，2020，「反転授業における効果的な教室活動：日本語の文法授業を対象に」『龍谷大学グローバル教育推進センター研究年報』，19-29.

中溝朋子，2018，「「日本語中上級文法クラスの反転授業の実践：対面授業におけるグループ学習の状況」『大学教育』第 15 号24-34.

原華耶，2022，「「日本事情」における反転授業の可能性と今後の課題：中上級日本語学習者を対象に」『東亜大学紀要』第 35 号23-32.

町田絵美，2019，「初級後半クラスでの反転授業の試み」『日本語教育研究』第 65 号191-209.

文部科学省，2012，「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け，主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm（2024/01/22参照）.

山内祐平・大浦弘樹，2014，「序文」ジョナサン・バーグマン＆アーロン・サムズ（著），山内祐平・大浦弘樹［監修］上原裕美子［訳］『反転授業』オディッセイコミュニケーションズ，pp.3-12.

山口大学日本語分科会，2023，「 2023 年後期　日本語科目履修案内（吉田キャンパス）」https://ds0n.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~isc/wp-content/uploads/2023/10/Japanese_Course_Guide_YOSHIDA_2023f_JP_0925.pdf（2024/01/22参照）.

【注】

1) 平井悦子・三輪さち子，2016，『中級へ行こう　日本語の文型と表現 55 第 2 版』スリーエーネットワーク．
2) 嶋田和子（監修）できる日本語教材開発プロジェクト（著），2012，『できる日本語　初中級』アルク．
3) 国際交流基金，2015，『まるごと　日本のことばと文化　初中級』三修社．
4) 坂野永理・池田庸子・大野裕・品川恭子・渡嘉敷恭子，2020，『初級日本語げんき［第 3 版］II 』ジャパンタイムズ出版．